



2009年8月12日放送

## 漢方頻用処方解説「柴胡桂枝湯」

東京女子医科大学東洋医学研究所 講師 盛岡 頼子

柴胡桂枝湯は、臨床的に非常に応用範囲の広い処方です。原点は『傷寒論』と『金匱要略』で、柴胡桂枝湯という名が示すとおり、小柴胡湯と桂枝湯の合方となっています。その生薬構成は柴胡、半夏、黄芩、人参、芍薬、桂枝、大棗、生姜、甘草の9味で、小柴胡湯と桂枝湯がそれぞれ3分の2くらいの量で含まれています。この処方は大きく分けて、呼吸器疾患、消化器疾患、精神神経症状などに用いられます。

まず、呼吸疾患についてですが、急性熱性疾患に関する記載が『傷寒論』太陽病下篇にあります。その条文は「傷寒六、七日、発熱微悪寒、支節煩疼、微嘔、心下支結、外証未だ去らざるものは柴胡桂枝湯之を主る」と書かれています。傷寒、つまり急性熱性疾患にかかって6、7日たったころは、本来であれば少陽病の時期です。しかし太陽病の症状である発熱や悪寒、それから支節煩疼、つまり関節痛があり、少陽病の症状である吐き気や心下支結もあります。心下支結とは、みぞおちに者が支えてすっきりしないこと、または少陽病の胸脇苦満の軽症と解釈され、大塚敬節先生によると腹直筋が季肋下で緊張している状態とされています。つまり病位が太陽病と少陽病の両方にまたがっている状態です。感冒にかかって数日たったころに、まだ少し寒気が残っていて、吐き気や意がすっきりし

ないなどの症状がでてきた場合に使われます。その他、気管支炎や気管支喘息、また、風邪をひきやすい人の体質改善に用いることもあります。

次に消化器疾患に対して使われる場合です。『金匱要略』腹満寒疝宿食病篇に「外台の柴胡桂枝湯の方は、心腹卒中痛の者を治す」とあります。心腹卒中痛とは満腹部の発作性の痛みです。この条文より、主に上腹部痛を伴う疾患によく用いられます。消化管疾患では胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、機能性胃腸症、過敏性腸症候群など、また肝胆膵領域では、上腹部の痛みや不快感、圧迫感を伴う胆石、膵炎、慢性肝炎にしばしば使われます。

3番目の精神神経領域ですが、心身症、神経症、あるいはいわゆる自律神経失調症といわれるようなさまざまな症状に用います。『傷寒論』発汗後病篇に「汗を発すること多く、亡陽譫語の者は下すべからず。柴胡桂枝湯を与え、その営衛を和し、以て津液を通ずれば、のち自ら癒ゆ」という条文がありますが、この中の「譫語」とは精神の混濁、うわごと、訳のわからないことを言うなどという意味で、これが基になって精神症状に使われているのではないかとされています。不安感やいらいらなど精神的に不安定で、ストレスの影響を受けやすく、肩こりや頭痛、あるいは身体の痛みやしびれなど不定愁訴と言われるような症状に用いられます。尾台榕堂の『類聚方広義』に「婦人、故なく憎寒壯熱し、頭痛眩暈、心下支結、嘔吐悪心、支體酸軟し、或いは癭痺し、鬱々として人に対するを悪み、或いは頻頻として欠伸する者、俗に之を血の道と謂う。此の方に宣し。」と書かれています。血の道、つまり更年期症候群などで出現するような多種多彩な症状に効く場合があります。その他には、てんかんに柴胡桂枝湯が有効であるという相見三郎先生の報告はよく知られています。これは小柴胡湯合桂枝加芍薬湯を使っていますが、この処方つまり柴胡桂枝湯の芍薬を増量したものとなります。少し古いものになりますが、1977年に400例以上のれんかん患者に柴胡桂枝湯を投与し、脳波所見の改善も含め、てんかんに有効であったことを報告しています。それから「痛み」に関してですが、先ほど消化器疾患の腹痛に用いられるという話をしましたが、それ以外にもいろいろな痛みに使えます。有持桂里の『稿本方輿輓』には「この方は疼みによくきく者なり。手足の痛や、腰の痛みなどにも効ある者なり。何れ、大小柴胡の症にて身内どこかに傷みある者には柴桂湯を用いてよく効あるものなり」ししとあるように、原因不明の四肢の痛み、神経痛、背中の痛み、腰痛などによい場合があります。

柴胡桂枝湯は柴胡剤の1つですが、そのなかでも中間からやや虚症くらいの方が適応になります。腹症は腹力が中等度からやや軟弱で、胸脇苦満と上腹部腹直筋の緊張が特徴です。胸脇苦満は柴胡剤の特徴的な腹症ですが、上腹部の腹直筋の緊張に関しては、先ほど述べました『傷寒論』の条文にある「心下支結」が、それにあたると言われています。構成生薬のなかで、柴胡は抗炎症、鎮静、健胃作用があります。そして鎮痙、鎮痛作用をも

つ芍薬が含まれていることは、柴胡桂枝湯が痛みなどに幅広く用いられる特徴となっているものと思われます。

鑑別処方ですが、柴胡剤のなかでは、大柴胡湯は実証で腹力も胸脇苦満も強く、便秘がちな人に使います。柴胡加竜骨牡蛎湯は柴胡桂枝湯より実証で腹部動悸を触れ、精神症状が強い場合です。四逆散は胸脇苦満と腹直筋の緊張を認め、ストレスによる症状に使うなど柴胡桂枝湯に似ていますが、四逆散のほうがより実証です。小柴胡湯は柴胡桂枝湯よりはやや実証で、腹直筋の緊張はなく、痛みにも用いられることは余りありません。柴胡桂枝乾姜湯は柴胡桂枝湯より虚症で、冷えが強く、より神経質な傾向にあります。柴胡剤以外では、消化器症状で、痛みよりも胃もたれや食欲不振が強い虚症のものには六君子湯を、胃の症状以外に、冷えが強く下痢傾向のものには人參湯を、みぞおちが硬く、つかえる感じが強いものには半夏瀉心湯を使います。また、みぞおちの痛みでは、下から突き上げるような痛みで冷えによる影響がある場合は当帰湯が使われます。

では最後に症例をご紹介します。現在47歳の女性です。初診は15年ほど前ですが、主訴は胃腸虚弱、風邪をひきやすいです。もともと疲れやすく、胃もたれ、食欲不振があり、当初腹心で心下部振水音が著明であったので、六君子湯を服用し、冷え性、月経痛もあったため、当帰芍薬散を併用していました。約3年後、胃もたれは改善しましたが、疲れたときに起こる胃の痛みや、風邪をひきやすい状態は続いていました。血液、尿検査、腹部エコー、胃カメラでは特に異常は認められません。腹症は腹部やや軟弱で胸脇苦満、上腹部の腹直筋の緊張を認め、当に柴胡桂枝湯証でした。そこで柴胡桂枝湯を服用したところ、胃の痛みは減少し、風邪もひきにくくなりました。現在でもエキス剤を1日に1-2回服用を続け、調子のよい状態を保っています。このような胃腸が弱く、風邪をひきやすい人で柴胡桂枝湯が奏功する例は数多くみられます。

以上、ご説明したように、柴胡桂枝湯は体質中等度からやや虚症の人に幅広く使える処方です。感冒や気管支炎の亜急性期、気管支喘息や風邪をひきやすい人の体質改善、上腹部の痛みや不快感を伴う消化器疾患、ストレスの影響を受けやすい人の肩こり、身体の痛み、精神不安などに有効な例が多く、比較的使いやすい処方といえるでしょう。